



マイホーム

My Own Home

早稲田 邦夫

Kunio Waseda

EICA 名誉会員

1980年代、核家族時代のサラリーマンの一生の夢は土地付きマイホームを持つことであった。バブル黎明時、自分の住んでいる借上げ社宅から1時間のところに、何とか手の届く一戸建て住宅を長期ローンで購入した。決め手は ①10年後に常磐新線が開通し、東京までドア to ドア1時間強で通勤可となる、②1985年につくば万博が開催予定されており、常磐高速道谷和原IC開通予定、国道294号線4車線化予定と、便利になる話が多く、自然は一杯溢れているし、子供を伸び伸び育てるには最高の場所であった。

先見性ありと自画自賛したマイホームは、借上げ社宅からは1時間であったが、会社までは片道2時間往復4時間であった。一日の1/6を通勤に費やす日々が続いた。会社に借金すると転勤命令が下り、単身赴任者になる例も多くあったが転勤もなかった。10年後に常磐新線が開通すれば片道1時間強になることを信じ、通勤し続けた。しかし、10年経っても、20年経っても開通しなかった。会社仲間、学会、協会の仲間から退職までには開通しないのでは？と散々からかわれた。その間、残業、過度のノミニュケーションが祟ったのか、何度か入院生活も経験した。あるとき、総務部門に所属している友人から「自己管理が出来なくて健康を害して困るのは自分と家族だけだ。自分の代わりは必ずいる。今の仕事は自分しか出来ない、自分しかいないという思い上がりは捨てろ。そしてどんなときも心配し、サポートしてくれる家族のことを考えろ！」との苦言は多いに心に響いた。そのときから健康と家族を第一として生活している。人間だから難しいときもあるが……。

人間の適応能力は素晴らしい。『住めば都』である。常磐線から関東鉄道常総線(単線)に乗り替え、ディーゼル機関車特有のゆったりとした発車・停車の動き、田んぼと林と竹林など緑豊かな廻りの景色は、気分を和らげてくれた。入社時は蝉の大合唱、退社時はカエルの大合唱、そして道端にひっくり返って足をバタバタさせている大カブト虫をハンカチに包んで持ち帰ると子ども達に喜ばれた。自然が一杯の住環境であった。

2005年、ついに常磐新線改め、つくばエクスプレ

ス(秋葉原-つくば)が開通した。時を同じくして事業部事務所が大手町から秋葉原へ移転となった。なんと最寄の駅までの所要時間は最短で32分。優しい奥様の車送迎があれば、通勤時間は1時間になった。

マイホーム購入から25年、ついに当初の念願通りの職住環境が完成した。踏み切りゼロ、ロングレール採用によるつくばエクスプレス(TX)の快適な乗り心地は通勤時間を快適な睡眠時間帯へ替えてくれたのは定年まであと数年のときであった。数年後、家族、会社の職場の皆が盛大に還暦祝いをしてくれた。仕事もそのまま続けられることになった。しかし、人生は何があるか分からない?というより何でもある。突如、勤務場所が東池袋へ移転し、通勤時間がプラス30分強となってしまったのだ。

マイホームの近隣はTXのお陰もあり、目覚しい発展を遂げた。歩いて10分以内のところに学校、大規模スーパー、コンビニ、クリニック、歯医者が出た。大きな公園もあり、絶好の居住環境になった。ご先祖(と言っても父母)を大事にしようとお墓も改葬して、近くに墓を建立し、いつでも墓参りを出来るようにした。

ふと、自分の廻りを見廻すと、30年以上を経て資産価値ゼロとなった家屋と年老いた住民ばかりである。人口減少する中での超高齢社会である。社会インフラも高齢化し、「持続可能な」という言葉が重みを増している。人間の寿命、住宅の寿命、社会インフラの寿命、環境の寿命を予見調和させながら、持続可能な社会に再生する時代である。歴史的にみても気象の変化、食糧事情の変化等で、民族の大移動が起きたと考えられている。小国日本においても、地殻変動、地球温暖化影響による気象変化(頻繁に大災害が発生)、超高齢社会で、住民の生活居住空間の計画的・長期的な小移動もあってもよいと思いつつ、人生90年時代の現代において、古希後の20年を妻と二人で明るく生きることが重要である。自立生活を基本として、過度に医療に頼ることをせず、元気で明るく過ごすのが理想である。大前提は健康が第一である。今週もジムに通って、身体を鍛えることにする。